

子ども期の親への援助要請および地域交流の経験と成人期の対人関係の

関連に関する研究

研究分担者	近藤 尚己	(京都大学大学院医学研究科)
研究協力者	長谷田真帆	(東京大学大学院医学系研究科)
研究協力者	西岡 大輔	(東京大学大学院医学系研究科)
研究協力者	雨宮 愛理	(東京大学大学院医学系研究科)
研究協力者	上野 恵子	(東京大学大学院医学系研究科)

研究要旨

他者に援助を求める行動には、子ども期に両親に援助を求めた経験が関係するとの報告がある。一方、近隣住民との関係の中で、他者に援助を要請するようになる可能性もある。そこで、子ども期の両親への援助の要請経験と成人期の対人関係を忌避する傾向の関連を調べ、その関係が地域交流の経験によりことなるかを検討した。名古屋市の18～39歳を対象にした調査データ1274人分を分析した。子どもの時に親に援助を要請したか否か、小・中学校の時の地域行事に参加したか否かの変数に加えこれらの交互作用項による対人関係忌避の割合の比を男女別に算出した。年齢・両親の最終学歴・子どもの時の母親の就労状況、経済状況、もう片方の親への援助要請経験の有無を調整した。父親への援助要請経験と対人関係忌避との関係に関しては地域行事への参加経験による効果の修飾は見られなかった。母親への援助要請経験に関しては、男性では、母親への援助要請経験がありかつ地域行事への参加経験があった場合、なかった場合に比べて対人関係の忌避が少なかった。親からの適切な援助を得ることに加えて子どもの地域交流を促すことで、将来の社会生活で困難に陥るリスクを緩和できる可能性があり、特に男性で重要であることが示唆された。

A. 研究目的

思春期の不登校、若者のひきこもりの背景に対人関係上の問題があることが示唆されている。対人関係上の困難が持続し、社会的に孤立する状況は、生涯にわたる個人の健康へと影響するとの報告もある^{1,2)}。

対人関係によるストレスへの対処には子どもの時の親との関わり、特に親に助けを求められる状況であったか否かが関係しており、将来の対人関係の忌避等の行動との関連が示唆さ

れている^{3,4)}。また、子ども期の地域交流の経験も、援助を受けられるという期待に寄与することが示唆され将来の対人関係にも関連する可能性がある⁵⁾。

成人期の対人関係によるストレスへの対応と子ども期の子から親への援助要請経験の有無の関連が、子ども期の地域交流の経験の有無によって異なるかどうか、すなわち子ども期の親への援助要請経験が成人期の対人関係によるストレスへの対処法に対して持つ効果を、地

域行事への参加経験が修飾するかを検証した研究は知る限りない。

そこで本研究では、名古屋市の若者を対象とした意識・生活実態調査のデータを用いて、子ども期の両親への援助要請経験と現在の対人関係によるストレスへの対処の関連において、子ども期の地域行事への参加経験による効果の修飾があるかを検討した。

B. 研究方法

名古屋市の平成30年度子ども・若者・子育て家庭意識・生活実態調査データ(オープンデータ)⁶⁾を使用した。名古屋市内に居住している18歳～39歳の者10000人を対象とし2018年に実施された。

対人関係の忌避は「次の中から、ふだんのあなたにあてはまると思うものすべてに○をつけてください」という質問における「他の人とのつきあいがわずらわしい」という項目で定義した。新名の心理的ストレス反応尺度を参考とした⁷⁾。両親への援助要請経験については、父親・母親への援助要請経験の程度について「子どもの頃のお父さんとの関係はどうでしたか 悩みごとなどを相談した」「子どもの頃のお母さんとの関係はどうでしたか 悩みごとなどを相談した」という質問項目を使用した。地域交流の程度に関しては「小学生・中学生の頃にどのような体験をしましたか 地域の行事に参加する体験」という質問項目を使用した。性別、年齢、両親の最終学歴、子どもの時の母親の就労状況、子どもの時の家庭の主観的経済状況、子どもの時のもう片方の親への援助要請経験についての情報も用いた。

修正ポアソン回帰分析により、援助要請経験と地域行事への参加経験それぞれの有無別に対人関係の忌避の状態にある者の割合の予測値を算出・図示し、効果の修飾の有無を評価した。統計解析には

Stata/SE15.1(Stata Corp., College Station, TX, USA)を用いた。

(倫理面への配慮)

使用したデータは人を対象とする医学系研究に関する倫理指針の適用範囲外であり、また、連結できない匿名化された二次資料である点で、倫理審査は不要であった。

C. 研究結果

対人関係の忌避がある割合は男性で約30%、女性で約25%であった(表1)。男女ともに子ども期に親への援助要請経験があった群はなかった群に比べて、また地域行事への参加経験があった群はなかった群に比べて、成人してからの対人関係の忌避の割合は小さかった。

父親への援助要請経験と対人関係の忌避の関連は男性のみ見られた(表2)。母親への援助要請経験と対人関係の忌避の関連は男女ともに見られた。地域行事への参加経験と対人関係の忌避に関しては男女ともに統計的に明確な関連を認めなかった。

父親への援助要請経験と対人関係の忌避の関連に対する地域行事への参加経験による効果の修飾は男女とも観察されなかった(図1)。

母親への援助要請経験に関しては、男性で、母親への援助要請経験と対人関係の忌避の関連に対する地域行事への参加経験による効果の修飾が観察された(図2)。

D. 考察

男性で母親への援助要請経験と地域行事への参加経験の両方が揃った場合に対人関係の忌避割合が小さい傾向にあった。この傾向は女性では見られず、また父親への援助要請経験と対人関係の忌避との関連については、地域行事への参加経験による効果の修飾は観察されなかった。

子ども期に親から援助を受けたことだけでなく、成長する過程で親以外の社会や一般他者への信頼が加わり、それらの経験が統合されて成人期以降の対人関係に影響を与える可能性あり、また、援助を要請する対象は成長とともに多様化することが考えられる。そのため、大学生以降の男性では援助を求める対象が家族から友人へ広がり、ストレスや援助の種類によっては友人の影響が家族を上回るといったことが生じ、男性では地域行事への参加経験の影響が大きく出たのかもしれない。

被説明変数が、妥当性の評価が限定的である点が本研究の限界の一つである。また、回収率が 14.0%と低かったことから分析対象者が名古屋市在住の同世代の人々の状況を正確に反映していない可能性がある。さらに、思い出しバイアスが存在する可能性がある。調査時点で対人関係の忌避の状態にある人は関連する過去の経験を強く意識している可能性があり、関連を過大評価している可能性がある。

E. 結論

対人関係の忌避を抑制する上で、特に男性では、子ども期の母親への援助要請経験に加えて、地域行事への参加経験があることの重要性が示唆された。例えば、親子関係の改善だけではなく、地域における社会関係資源（ソーシャルキャピタル）を醸成し、子どもが地域で多様な人々と交流しやすい環境を整えることで、子どもが将来対人関係の忌避が生じやすい傾向に陥ることを予防し、社会生活を円滑に送りやすくなる可能性がある。また、地域交流を促進する際には、母親、父親との関係性を考慮し、親子関係の向上につながるような地域交流の施策を実施することで格差へ配慮できるかもしれない。

【参考文献】

- 1) 相田潤, 近藤克則. ソーシャル・キャピタルと健康格差. 医療と社会. 2014; 24: 57-74.
- 2) 宮本みち子. 成人期への移行モデルの転換と若者政策. 人口問題研究. 2012; 68: 32-53.
- 3) 加藤司. 対人ストレス過程の検証. 教育心理学研究 2001; 49: 295-304.
- 4) 永井智. 大学生の友人関係における援助要請およびソーシャル・サポートと学校適応の関連. 教育心理学研究 2016; 64: 199-211.
- 5) 吉城秀治, 辰巳浩, 堤香代子, 他. 児童期における地元地域との関わりとソーシャル・キャピタル形成の関係. 都市計画論文集 2018; 53: 333-40.
- 6) 名古屋市. 平成 30 年度子ども・若者・子育て家庭意識・生活実態調査. 2018. <https://www.city.nagoya.jp/kodomoseishonen/page/0000114950.html> (2020 年 12 月 8 日アクセス可能).
- 7) 新名理恵, 坂田成輝, 矢富直美, 他. 心理的ストレス反応尺度の開発. 心身医学 1990; 30: 29-38.

F. 研究発表

1. 論文発表

中村有里, 長谷田真帆, 西岡大輔, 雨宮愛理, 上野恵子, 近藤尚己. 子ども期における親への援助要請および地域交流の経験と成人期の対人関係の関連. 日本公衆衛生雑誌. 印刷中

2. 学会発表

なし

G. 知的財産権の出願・登録状況

なし

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

表 1. 分析対象者の属性

	男性		女性	
	対象者 全体 n = 490	うち対人関係 の忌避あり n = 137 28.0% n (%) or mean [SD]	対象者 全体 n = 784	うち対人関係 の忌避あり n = 192 24.5% n (%) or mean [SD]
年齢	30.37 [5.96]	31.03 [5.32]	30.16 [6.00]	29.69 [6.08]
父親の最終学歴				
大卒以上	218	51 (23.4%)	351	85 (24.2%)
大卒未満	234	68 (29.1%)	375	84 (22.4%)
不明・無回答	38	18 (47.4%)	58	23 (39.7%)
母親の最終学歴				
大卒以上	107	28 (26.2%)	129	31 (24.0%)
大卒未満	345	96 (27.8%)	624	153 (24.5%)
不明・無回答	38	13 (34.2%)	31	8 (25.8%)
子どもの時の主観的家庭経済状況				
苦しかった	80	31 (38.8%)	144	34 (23.6%)
苦しくなかった	395	100 (25.3%)	629	152 (24.2%)
不明・無回答	15	6 (40.0%)	11	6 (54.5%)
子どもの時の母親の就労				
あり	179	47 (26.3%)	260	64 (24.6%)
なし	294	83 (28.2%)	496	119 (24.0%)
不明・無回答	17	7 (41.2%)	28	9 (32.1%)
子どもの時の父親への援助要請経験				
なし	362	119 (32.9%)	578	150 (26.0%)
あり	128	18 (14.1%)	206	42 (20.4%)
子どもの時の母親への援助要請経験				
なし	189	68 (36.0%)	183	64 (35.0%)
あり	301	69 (22.9%)	601	128 (21.3%)
子どもの時の地域行事への参加経験				
なし	102	36 (35.3%)	136	41 (30.1%)
あり	388	101 (26.0%)	648	151 (23.3%)

SD = Standard Deviation (標準偏差)

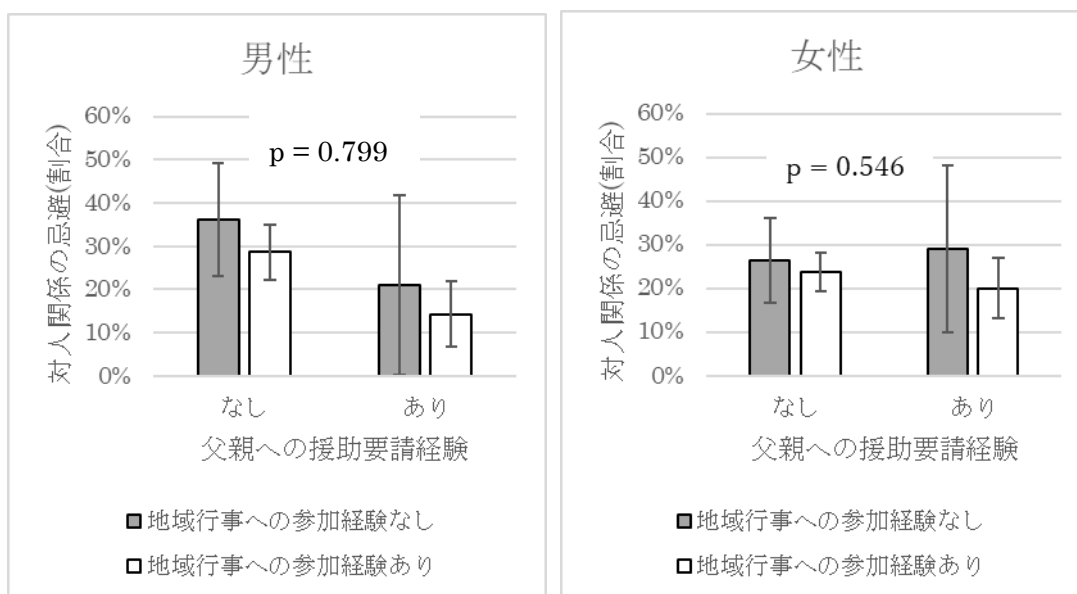
表2. 子ども期の親への援助要請経験・地域行事への参加経験等の属性による対人関係の忌避の割合の比

	男性 (n = 490)			女性 (n = 784)		
	単変量解析	多変量解析*		単変量解析	多変量解析*	
		父親	母親		父親	母親
	PR(95%CI)	PR(95%CI)	PR(95%CI)	PR(95%CI)	PR(95%CI)	PR(95%CI)
子どもの時の父親への援助要請経験あり(参照：なし)	0.43(0.26-0.70)	0.58(0.20-1.66)	0.53(0.32-0.89)	0.79(0.56-1.11)	1.10(0.51-2.34)	0.89(0.62-1.27)
子どもの時の母親への援助要請経験あり(参照：なし)	0.64(0.46-0.89)	0.79(0.55-1.13)	1.29(0.65-2.54)	0.61(0.45-0.82)	0.62(0.45-0.86)	0.76(0.39-1.45)
子どもの時の地域行事への参加経験あり(参照：なし)	0.74(0.50-1.08)	0.79(0.53-1.20)	1.10(0.62-1.96)	0.77(0.55-1.09)	0.89(0.60-1.33)	0.98(0.54-1.78)
子どもの時の父親への援助要請経験*地域行事への参加経験		0.86(0.26-2.82)			0.77(0.33-1.79)	
子どもの時の母親への援助要請経験*地域行事への参加経験			0.51(0.24-1.11)			0.78(0.38-1.63)
年齢	1.02(0.99-1.05)	1.02(0.99-1.05)	1.02(0.99-1.05)	0.99(0.96-1.01)	0.98(0.96-1.01)	0.98(0.96-1.01)

PR = Prevalence Ratio (割合の比)、CI = Confidence Interval (信頼区間)

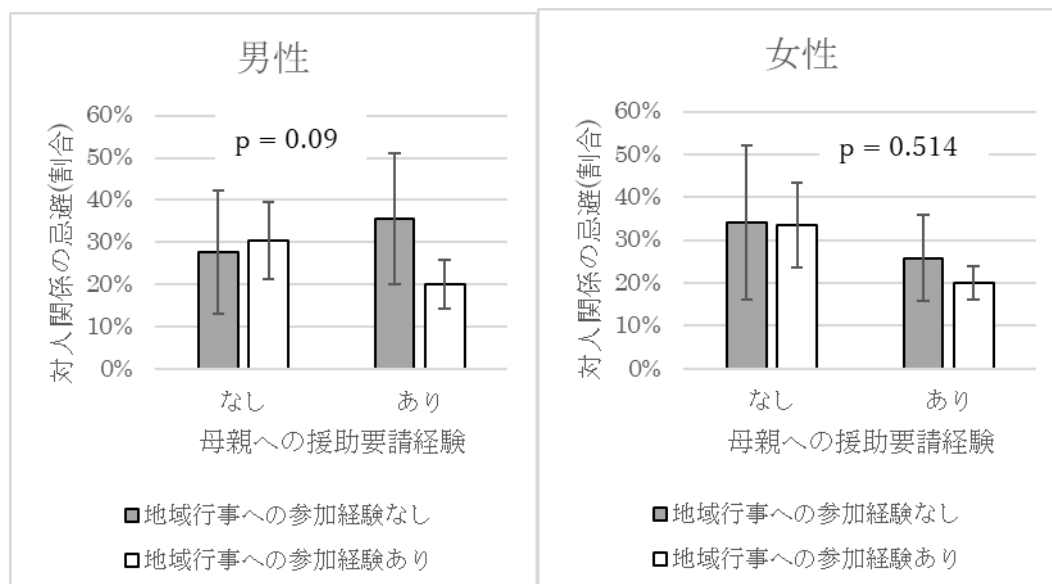
* 子どもの時の父親への援助要請経験、子どもの時の母親への援助要請経験、父親・母親への援助要請経験それぞれと地域行事への参加経験の交互作用項に加えて、年齢、父親の最終学歴、母親の最終学歴、子どもの時の家庭経済状況、子どもの時の母親の就労状況を調整

図 1. 父親への援助要請経験・地域行事への参加経験それぞれの有無別の対人関係の忌避の割合の予測値



エラーバーは 95%信頼区間。p 値は交互作用の p 値。

図 2. 母親への援助要請経験・地域行事への参加経験それぞれの有無別の対人関係の忌避の割合の予測値



エラーバーは 95%信頼区間。p 値は交互作用の p 値。